

## 知事をはじめ各審査員等からのコメント

### 大野 元裕（実行委員会会長／埼玉県知事）

埼玉県は、次の世代を担う新たな才能の発掘を目的に映画祭を開催してきた。17回目を迎えた今年は、新型コロナウイルス感染症のリスクを考慮し、オンライン配信での開催を決断した。初の試みだが、本映画祭のファンを広げる機会となることを願っている。

今年のコンペティションには、106の国と地域から1,169本の作品が集まった。国数、作品数ともに過去最多であり、「若手映像クリエイターの登竜門」として大きな期待が寄せられていることを実感する。

期間中は、ノミネート作品24本をいつでも視聴いただける。皆様の投票で決まる「観客賞」もあるので、若手クリエイターの熱い思いが込められた作品を、是非、ご覧いただきたい。

### 奥ノ木 信夫（実行委員会副会長／川口市長）

毎年、SKIPシティを会場として、川口市内外から多くのお客様にご来場いただき、感謝申し上げます。今年は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2004年の初開催以来、初めて、オンライン配信での開催となっている。今までご来場できなかったお客様にも、作品をご覧いただける機会となるので、これまでに以上に、多くのお客様に映画祭を楽しんでいただきたい。

映画界の次代を担うクリエイターの発掘と育成を、今後も継続的に支援し、日本をはじめ、世界中の人たちからも厚い支持を受ける国際映画祭を目指して、開催都市として、本映画祭を盛り上げて参りたい。

### 八木 信忠（映画祭総合プロデューサー）

今年は新型コロナウイルス感染症流行のため、インターネットでの上映会ということになった。残念だが苦肉の策であり、楽しみにされていた皆様にはお許し願えたら幸いである。今回は、海外・国内合わせて1,169作品の応募があった。前年に比べて308作品の増加だ。作品募集時はここまで新型コロナウイルスが世界中に蔓延すると想定していなかったが、こうした困難な状況にめげることなく、引き続き映画製作が活発に行われていくことを願っている。どんな作品が入賞に輝くか、皆様、期待を持ってご覧いただきたい。

### 澤田 正道（国際コンペティション審査委員長／映画監督）

現在、私たちは、コロナウイルスによる影響もあって、国境を越えるということ制限されている。ただ、この状況にあっても、映画は様々な方法を見つけ国境を越えようとしている。伝えたい、作りたいという願望と、観たい、共有したいという欲求が常に相互作用で存在しているからだと思う。今回間違いなく、私自身も多くのことを発見し、学ぶことになるかと確信している。同じ映画界の人間としてジェラシーを覚えるような、そんな映画に出合えることを心待ちにしている。日本のひとつの地方都市、川口市からの提案がますます世界からの関心を惹きつけることを願ってやまない。

**部谷 京子（国内コンペティション審査委員長/美術監督）**

このコロナ禍の中で、映画製作者の皆さんは、揺るぎない信念と覚悟を持って現場に臨んでいることと思う。この映画祭を通して、皆さんの作品と出会うこと、そして皆さんを知る機会を得られて、本当に幸せだ。この映画祭を目一杯楽しみましょう。

**土川 勉（映画祭ディレクター）**

現在の状況下での映画祭開催に当たっては様々な意見があったが、若き映像作家たちの作品の発信の場であることが本映画祭の第一の使命と考え、またコロナ禍の影響を最大限受けないで発表できる場として、配信による開催を選択した。本映画祭は今年で17回目を迎えるが、年々コンペ作品の質も向上して、映画祭終了後に一般公開される作品も増えていることは嬉しい限りである。今年は国際コンペティションの審査委員長に、日本の才能ある映画監督を世界に発信させている著名なプロデューサーの澤田正道さん、国内コンペティションの審査委員長には著名な映画美術監督の部谷京子さんをお迎えすることができた。今から審査会を楽しみにしている。

